校長メッセージ　～合言葉は「子どもに軸足！」～

東長良中学校　丹羽

自らを高めるための競争

北京で開催された冬季オリンピック、連日、日本人選手の活躍が放映され感動や元気をもらいました。競技スポーツの世界では、しのぎを削り合うのは当然のことで、競争がなければ競技スポーツは成り立ちません。しかし、今の世の中では、一昔前の競争社会で生じた社会のひずみからの反省もあり、行き過ぎた競争は、多くの敗者を生み社会を疲弊させることから、人と競い合うより、「自分らしさを大切に生きていこう」や、「競争より協奏が大事」だというような風潮が強い気がします。

「自分らしさを大切に」それは一見、とても健全なように感じますが、行き過ぎるとそれもまた不健全なものになってしまうかもしれません。ほどよい健全な競争とのバランスが大切ではないかと思うのです。それは、北京オリンピックで互いに競い合うアスリートの姿を見ていると感じさせられました。彼らは、ライバルと競い合うことで自分らしい輝きを放っています。彼らは勝負にもこだわりますが、目先の勝敗だけでなく人としての生き方や成熟に、より重きを置いて競技に臨んでいるように見えます。そんな彼らの姿を見ていると、健全な競争というものがいかに人間を成長させるのか、ということを改めて感じさせられます。

競争には、健全なものと不健全なものがあるような気がします。不健全な競争というのは、恐れをベースにした暗く淀んだ感情がそこにあります。競争心が過熱するあまり、競争すること自体が目的になる、相手を打ち負かすこと自体が目的になる、という状態は強力な力になるとは思いますが、あまりいいものではないと思います。最上位の目的を見失う可能性があるからです。例えば、「A さんを追い越す！」ことを至上命題にして懸命に練習し、その結果、その願いが成就したところで、いったい何を得られるのか。短期的には優越感、達成感が得られるかもしれませんが、そもそも自分が何を目指していて、どういう力を付けたいのかといったことを見失います。

一方、健全な競争には、互いの尊重、人間としての成長といった前向きな感情があります。恐れに飲み込まれず、人間としての尊厳を手放していません。つまり、勝負に負けることを恐れるあまり、人間として大切にすべき心をなくしてしまうと、競争は不健全なものに変わってしまい、何でもありの下品な競争に成り果ててしまうのです。

恐れに負けることなく、人間としての尊厳を手放さなければ、競争というものは素晴らしい成長の場になるのだということです。競い合う中には独特の緊張感があります。その中で人は磨かれていきます。競争は、勝つためというより自らを高めるためにあるものだと、認識を改めると見える景色が違ってきます。競争を恐れて勝負から逃げていると、可能性はどんどんしぼんでいきます。

競争はあくまでも自分の心でコントロールできる範囲で行うべきではないかと思います。「意識的に競争心のオン･オフを切り替えられる」、何かしら気合を入れたいときにライバルのことを強く思い浮かべれば、絶対に勝ちたいという気持ちが湧き出る一方、ふと冷静になれば「あ、熱くなりすぎちゃいけないな」と自身を冷却することもできる。そんな心が重要だと思います。